

ランドルフ・ボーンとその時代

大西 哲

1. はじめに

ランドルフ・ボーンは時に、「忘れられた予言者」「文学的ラディカル」「反戦論者」「多文化主義の先駆者」などといろいろな名称で呼ばれているが、アメリカの1910年代を駆け抜けていった若き思想家であった（1918年12月、ボーンは当時、世界的に猛威を振るっていたスペイン風邪にかかって、わずか32年でその生涯を閉じている）。ボーンの盟友で、アメリカ社会の分裂を、「ハイブ로우」と「ロウブ로우」という言葉で分析したヴァン・ワイク・ブルックス（Van Wyck Brooks, 1886-1963）は、後年ボーンのことを思い出して、ボーンは「若い世代の空飛ぶくさび（the flying wedge）」であったと述べ、また親しい友人であったウォルド・フランク（Waldo Frank, 1889-1967）は、「戦争（第一次世界大戦）は、デューイ（ボーンの恩師）も含めて、世の中全体を狂気に駆り立てたが、ボーンだけは正気であった」と述べている⁽¹⁾。『ニュー・リパブリック』誌（*New Republic*）、『セヴン・アーツ』誌（*Seven Arts*）、『ダイアル』誌（*Dial*）など、当時の重要な雑誌、リトル・マガジン誌で華々しい活躍を演じていたボーンの「時期尚早の死（untimely death）」は、多くの文筆家、とくに若い世代の文筆家には衝撃的な出来事であった。

しかしその後、大恐慌、第二次世界大戦、冷戦の時期を通して、ボーンはしばし忘れられた思想家であった。1960年代に入ると、アメリカのヴェトナム戦争への介入が進んだ。60年には軍事顧問団の派遣、62年には軍事援助司令部の設置、64年トンキン湾事件の発生、そして65年にはアメリカ軍による北爆が開始され、アメリカ海兵隊がダナンに上陸している。泥沼化するヴェトナム戦争に対する関与に、国内ではそれに対する反戦運動が、全米のキャンパスを中心に広がっていった⁽²⁾。ちょうどこの時期に、ボーンの二冊の本が出版された。一冊は「戦争」と「トランス・ナショナル・アメリカ」に関するエッセイを集めた本、『戦争と知識人』（*War and the Intellectuals*, New York,

1964)である。もう一冊は、ボーンのエッセイと手紙のアンソロジーである『ランドルフ・ボーンの世界』(*The World of Randolph Bourne*, New York, 1965)である。10年代に、ほとんど孤軍奮闘という形で反戦論を展開したボーンの再評価を、時代が必要としていたのである。

ボーンはまた、1970年代になると、別の側面から再評価を受けることになる。「トランス・ナショナル・アメリカ」('Trans-National America', 1916)、ボーンが1916年に『アトランティック・マンスリー』誌(*Atlantic Monthly*)に発表したこのエッセイが、多文化主義の潮流に乗って、再び広く読まれるようになったからだ。ユダヤ系の哲学者、ホレス・カレン(Horace Kallen, 1882-1974)が『ネイション』誌(*Nation*)に発表した二つの論文、「民主主義対メルティング・ポット」('Democracy Versus the Melting-Pot', 1915)に触発されていたボーンは、このエッセイの中で、アメリカ社会が「人種の坩堝」であるという考え方を否定し、多様な要素を勘案して、アメリカは諸文化の連合体となるべきだと主張した。そしてこの仕事を(ボーンはここで「コスモポリタニズム」という言葉を用いているが)、何よりもアメリカの若い世代に委ねた⁽³⁾。

アメリカはすでに世界連邦のミニチュア版、太陽のもとで……もっとも異質な民族が実質的に特性を保持しながら平和に共存するという、歴史上初めてのあの希望の奇跡が実現されている大陸である。……こうしたコスモポリタニズムを受け入れて、自覚的な実りの多い目的を抱き、それを推進する任に当たるのは他ならぬ若い世代のアメリカ人である。……植民地主義はコスモポリタニズムへと成長し、その母親は一つの国家ではなく、精神に捧げられる何か人生を高めるものを持つすべての人々なのである⁽⁴⁾。

「人種の坩堝」という考え方は「支配階級に適している」とボーンは非難し、「いわゆる外国系市民」を賞賛して、「民族を代表する移民団からなるコスモポリタンの連邦」を歓迎したのである。そして「コスモポリタニズム」、すべての民族に世界の「新たな精神的市民権」を約束することが、彼の希望であった⁽⁵⁾。

本稿ではこれから何回かに分けて、この若き思想家ランドルフ・ボーンの生涯を追い、彼が私たちに問いかけたもの(「若さと人生」、「トランス・ナショナル・アメリカ」、そして「戦争と知識人」)を検証していきたいと思う。短い前書きの結びとして、すでにいろいろなところで、何度も引用されているジョン・ドス・パソス(John Dos Passos, 1896-1970)のスタンザをやはり掲げておこう。ボーンに関する当時の一般的なイメージがよく表わされていると思うからだ⁽⁶⁾。

This little sparrowlike man,
 Tiny twisted bit of flesh in a black cape,
 Always in pain and ailing,
 Put a pebble in his sling,
 And hit Goliath squarely in the forehead with it.
 ... If any man has a ghost,
 Bourne has a ghost,
 A tiny twisted unscared ghost in a black cloak
 Hopping along the grimy old brick and brownstone streets
 Still left in downtown New York,
 Crying out in a shrill soundless giggles:
War is the health of the State.
 (1919, centerpiece of the *U.S.A.*, trilogy by John Dos Passos, 1932)

この小柄なスズメみたいな男は、
 黒い外套に小さなねじれた肉体を包み込んで、
 いつも痛みと病気に苦しみながら、
 小石を投石器に挟んで、
 ゴリアテの額をその小石でまともに打ち付けた。
 …もし人に亡霊がついているなら、
 ボーンにも亡霊がついている、
 小さなねじれた、恐れを知らぬ亡霊は、黒いマントを羽織り、
 ニューヨークの下町にまだ残されている、
 気味の悪い古いレンガと褐色砂岩で出来た通りをぴょんぴょんと飛び跳ねながら、
 かん高い音の出ないクスクス笑いで叫んでいる、
 「戦争は国家の健康法だ」と。
 (『1919』, ジョン・ドス・パソス『USA』三部作, 1932年)

2. 幼少年時代—障害について

ランドルフ・シリマン・ボーン (Randolph Silliman Bourne, 1886-1918) は、1886年5月30日、マンハッタンから20マイルほど離れたニュー・ジャージー州の小さな町・ブルームフィールド (Bloomfield) で生まれた。父方も母方も17世紀の初頭にはアメリカに涉ってきた家系で、父方の祖父 (Theodore Bourne) はこの地で最初に教会を建てた長老派の教会牧師であり、曾祖父 (George Bourne) は奴隷制廃止論者で、ラル

フ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) の知人という家柄であった。ボーンのみドル・ネームは、南北戦争時の北軍の大佐で、戦争で亡くなった母方の伯父 (Colonel William Silliman) から付けられている⁽¹⁾。ボーンの妹ルース (Ruth, ボーンは4人兄弟の長男) は後に、一族の大半のものが専門的な職業人で、「女性は決して仕事をしていなかった」と述べている⁽²⁾。テニス・コート、小さなゴルフ・コース、樹上の小屋 (子どもの遊び場) などがあったというのであるから、相当に裕福な暮らしであったようだ。

しかしボーンは「五体満足」でこの世に生まれてきたわけではなかった。いやもっと正確に言えば、出産時の不手際で、顔の形が変形してしまった。「ランドルフの出産は大変でした」と後に母親は述べているが、鉗子分娩で赤ん坊の顔が傷つけられ、口元が終生ゆがんだままになってしまった⁽³⁾。へその緒が左側の耳に巻きついていて、耳もひどく変形したままであった。喜びを迎える瞬間が、恐ろしい悲劇へと転じた。担当医の過失であったかもしれないが、当時の医療水準を考えれば致し方ないことであったのかもしれない。また担当医は、ブルームフィールドでは尊敬されていたボーン家の家庭医であった。

さらに追い討ちをかけるように、もう一つの不運な出来事がボーンを襲う⁽⁴⁾。4歳のときに脊髄の結核に罹り、それが原因で背骨が曲がり、発育が阻害されてしまった。残されたパスポートの記載によると、ボーンの身長は150センチぐらいであった。本当に不幸な出来事の連続としか言いようもないが、これが本人や家族に与えた影響は相当に深刻であった。ボーンのもう一人の妹ナタリー (Natalie) は、「幼い子どもの頃から、私はランドルフが傷ついたり、侮辱を受けないように守りたいと心から願っていました。ランドルフの身体が他の子達と違うという理由で、ランドルフをあざける子ども達に向かって、私は『しかめっつら』をし、舌を突き出したことを覚えています」と述べている⁽⁵⁾。

初めてボーンに出会ったときの印象について、多くの友人が記している。それは一様に背骨の曲がった低い身長と、異様に大きな頭、そして顔の変形に関するものであった。「一瞬、カエルの王子かと思った」とルイス・アンターマイヤーは記し、ウォルド・フランクは、「彼の顔はゆがみ、耳は拷問にかけられたようにねじれ、肌の色は黄ばんでいて、呼吸は耳に聞こえるほど苦しげであった」と書いている⁽⁶⁾。

こうした身体的な特徴に関しては、ボーン自身も随分と気にしていたようで、ボーンの伝記を最初にしたルイス・フィラー (Louis Filler) によれば、彼は写真に写るときには、慎重に左側の耳が見えないように髪を梳き、人の後ろに隠れるように立っていたようである⁽⁷⁾。メイドの証言に寄れば、2歳でラベルの文字を追ひ、小学校入学前に聖書を読めたほど聡明な少年は、また本来は社交的で、異性の大好きであった少年は、こうした身体の変形 (deformity) によりひどく自己の存在を、自尊心を傷つけられた

が、それを避けたい「自分の宿命」と受け止めるほかはなかったようだ。

…（障害のある人間にとっては）、恐らくは子ども時代が一番辛い時期である。子どもの頃、彼は見知らぬ土地の見知らぬ生き物なのである。他の少年たちと遊びまわり、いろんなゲームや「いたずら」が出来るほどの強さはあるのに、実際にはそのいずれをもやり遂げられる体力がないこと、それが私自身の宿命であった。自分の失敗や技術の欠如を、自分ではコントロールできない事情のせいだとは決して思わなかった。そうではなくて、それは、厳格なカルビン主義に基づいて育てられた結果だと思うのだが、私自身のある道徳的な弱さに由来するものだといつも考えていた⁽⁸⁾。

厳格なピューリタニズムの伝統がまだ色濃く残っている田舎の町で、ボーン少年は友達と一緒に遊べない口惜しさを、自らの信仰心の不足と捉えて耐えていた。後年、盟友となるヴァン・ワイク・ブルックスとともに、激しくアメリカにおけるピューリタンの伝統を攻撃する下地が、すでにここに一つあるようだ。

ではどのようにしてボーンは、障害により導かれた宿命から脱出しようとしたのか。学校では「できるだけよい子で振る舞い（a very well-behaved boy）」、音楽（ピアノの練習）に熱中しながら、ボーンはいったい何を待っていたのか。それは彼がその後の文筆生活で生涯のテーマとしたもの、また多くの同時代人が一番よく記憶にとどめているボーンのテーマ、すなわち若いアメリカの希望と、そして何よりも友人であった。

障害のある人間のドアは、いつも閉じられている。そして、それを開ける鍵は外にある。障害のある人間も、心の中に魅力という宝物を秘めているかもしれない。しかしそうした宝物は、外にいる人間が彼と協力して、ドアの鍵を開けてくれなければ、決して現われてはこないであろう。友達に、普通の人間の場合よりもはるかに、自分自身のパーソナリティを見つけるうえで欠かせない存在となる。いわば障害のある人間は、友達と一緒にしか存在し得ないのだ⁽⁹⁾。

ここにはボーンの障害観とともに、本当に信頼の出来る友人、ともに未来を語り、若い国アメリカの将来をともに担っていける仲間を希求する、ボーンの心からの願いが表明されている。その彼の願いが、どのような形で実現されていくのか、また阻害されていくのか、それが本稿のテーマとなる。

3. 1910年代のアメリカとリトル・マガジン

ボーンの活躍した時期は、コロンビア大学に入学（1909年）後、大学の雑誌に投稿を始めてからスペイン風邪で急死するまで（1918年）、およそ10年足らずの短い期間である。年齢で言えば、23歳から32歳までである。この短い時期にボーンは、大学の学内誌（『コロンビア・マンスリー』誌 *Columbia Monthly*）への投稿を契機に、その雑誌の編集委員に選ばれ、修士号の学位を得た同じ年（1913年）には、26歳の若さで、最初の著作『若さと人生』（*Youth and Life*, Boston, 1913）を出版している。

ボーンの活躍の舞台は雑誌であった。先に述べた大学の学内誌を皮切りに、『アトランティック・マンスリー』誌、『ニュー・リパブリック』誌、『セヴン・アーツ』誌、『ダイアル』（*Dial*）誌などに、ボーンは次々とエッセイ、評論などを発表した。そこで、まずボーンの活躍した時代と舞台について、簡単に概観してみることにする。

ボーンがコロンビア大学で教えを受けたチャールズ・A・ビアード（Charles Austin Beard, 1874-1948）と並び称される歴史家、カリフォルニア大学バークレー校のヘンリー・F・メイ（Henry F. May, 1915-）は、その著『アメリカの無垢の終わり』（*The End of American Innocence*, New York, 1959）のなかで、アメリカが第一次世界大戦に参戦する頃の数年間（1912年～17年）に的を絞り、この時期のアメリカの文化的、政治的な状況を生き生きと検証し、この時期が19世紀から引き続く「お上品な」伝統と、1920年代につながる「モダン」な熱狂の端境期にあり、すでに伝説化したこの時期のヴィクトリアニズムに対する反逆が、実は大戦以前には、まだその形成途上にあったことを明らかにしている。さらにメイは、1993年に再版したこの書の「モーニングサイド版あとがき」（コロンビア大学）のなかで、「20世紀の初頭においては、他のどんな時期と比べてもと思うのだが、そして現在よりもはるかに、あらゆる色合いを帯びたアメリカ人の考え方やあらゆるレベルの文化が、それぞれの意見を発表できる雑誌を抱えていた」と記している⁽¹⁾。

一方、『パーティザン・レビュー』誌（*Partisan Review*）の歴史を中心に、アメリカにおける文学的なラディカリズムの歴史を跡付けたジェイムズ・B・ギルバート（James Burkhart Gilbert）の著、『作家と党派』（*Writers and Partisans*, New York, 1968）のなかでも、著者はやはり、第一次大戦前夜のアメリカの知的世界を概括して、「しかしながら、文学と政治との結合は、単なるあいまいな誘因によって引き起こされたのではなかった。それはいろいろな考え方が相互に変更可能であるらしいという一般的な雰囲気によって、突然に引き起こされたのである。そしてこうした雰囲気は、二つの重要な知識人の機関誌、『マッシズ』誌（*Masses*）と『セヴン・アーツ』誌とによって高められていった」と述べている⁽²⁾。

さらに文芸批評家アルフレッド・ケイジン (Alfred Kazin, 1915-1998) は、10年代のグレニッチ・ヴィレッジの様子を次のように伝えている。

1910年から1917年の世界は、アルカディアに変わったワシントン・スクエアであり、そこではいつでも障壁は倒されていて、常に雑誌は前途有望で、いつでも労働者がデモ行進をしていて、グレニッチ・ヴィレッジのあらゆる寝室で天才が芽を出しかけていて、いつでもイサドラ・ダンカンが踊っていた、という今では月並みになった伝説を——ジョン・リードがバイロン風の英雄であり、メイベル・ドッジが女主人であり、ランドルフ・ボーンが殉教者であり、ヴァン・ワイク・ブルックスが神託を伝える人であるあの世界を——知らないものがあるであろうか。アメリカの他のどんな世代に、これほどまでに光り輝く青年期があったであろうか。』⁽³⁾

これらの引用からも明らかなように、第一次大戦までのアメリカの10年代は、前代から続く古い慣習（一般には厳格なピューリタニズム——ボーンに障害に基づく困難を、自らの信仰心の欠如と思わせた宗教的枠組み——とヴィクトリア朝的なお上品さ）がまだ支配的な社会状況のなかで、若い知識人たちがヨーロッパ直輸入の理論（進化論、ベルグソンやニーチェの哲学、マルクス主義、深層心理など）で武装して、旧体制に対して、盛んに異議申し立てを始めた時期であった。そしてこの頃、ようやくアメリカ文化の中心地となり始めていたニューヨーク、とくにグレニッジ・ヴィレッジでは、こうした若き知識人たちが集まって、文学について、音楽について、演劇について、そして人生について熱心に語り始めていた。

彼らはまた、政治にも深い関心を抱き、代表的なマックレイカーであるリンカーン・ステフェンズ (Lincoln Steffens, 1866-1936) が見事に暴き出した政治の世界の腐敗に激怒し、革命的なジャーナリスト、ジョン・リード (John Reed, 1887-1920) が伝える労働者のストライキやメキシコ革命の報道に感激していたのである。後年、当時を振り返ったマルカム・カウリー (Malcolm Cowley, 1898-1989) は、「1911年から1916年までを満たしていた喧騒や希望にあふれた状態……。いたるところで、新たな機関が——雑誌、クラブ、芸術コロニー、フリーラブ・コロニー、一物件税制 (single-tax) コロニー、実験学校、画廊などが——設立され続けていた。いたるところに、同士の愛の意識と多大な変化の可能性があふれていた」と述べている⁽⁴⁾。そしてその中心に、ランドルフ・ボーンは踊り出ようとしていた。

次にメイ、ギルバート、カウリーが一様に触れていた当時の雑誌の状況、ボーンの活躍の実際の舞台について見てみよう。第二次世界大戦の余燼がまだ冷めやらぬ頃、フレデリック・J・ホフマン (Frederick J. Hoffman)、チャールズ・アレン (Charles

Allen), そしてキャロリン・F・ウルリッチ (Carolyn F. Ulrich) の三名が, アメリカのリトル・マガジンについての画期的な研究書を著した。『リトル・マガジン——歴史と文献解題』(*The Little Magazine: A History and A Bibliography*, Princeton, 1947) である。この研究書のなかで, 著者たちは12章にわたって, ささまざまな文学運動の歴史やリトル・マガジンのタイプについて詳しく述べ, さらに150ページにおよぶ文献解題を試みている。1891年から1946年まで, アメリカで発行されたりトル・マガジンについては, ほぼこの一冊でおおよその, それもかなり詳細な全体像をつかむことができる。

この研究書が世に出てから32年後(1978年)に, 今度はトライクォーターリー (TriQuarterly) とプッシュカート (Pushcart) という二つの小出版社の協力を得て, エリオット・アンドソン (Elliott Anderson) とメアリー・キンジー (Mary Kinzie) の編集によるもう一冊のリトル・マガジンの研究書が出版された。これが『アメリカにおけるリトル・マガジン——記録による現代史』(*The Little Magazine In America*, New York, 1978) である。こちらの研究書は先の『リトル・マガジン——歴史と文献解題』の姉妹編となるように意図したと編者たちは述べているが, 本の構成は先の研究書とは異なり, 42名の実際の雑誌編集者による逸話的な文章が中心で, 最後に85ページほどの文献解題が付されている。第二次大戦後のリトル・マガジンの動静は, こちらの研究書によって十分に窺い知ることができる。そこで, これら二つの研究書を手がかりに, まずリトル・マガジン全般について, 簡単に触れてみよう。

一般にリトル・マガジンといえば, 商業主義的な見地には立たず, ごく限られた読者層を対象とする, 短命の前衛的な(しばしば実態が伴わないこともあったようだが)出版物が思い浮かぶ。寄稿者は大半が新しい, ときには実験的な手法を駆使する文筆家たちで, 彼らは既成の文学的な潮流に抗して, 未開の文学的な空間を切り拓こうとする野心家たちである。「リトル」と言っても, 雑誌の規模とか内容を直接的に指しているわけではなく(もちろん, リトル・マガジンの大半が小規模の, 同人雑誌的な要素を多分に含んでいるのだが), むしろ限定された知的な読者層のグループが対象の文芸誌, あるいはオピニオン誌ということで, 概して既成の大きな雑誌では取りあげてもらえない文筆家, あるいは作品の出版を主眼としている。この「限定された知的な読者層のグループ」というのは, たとえば今世紀初頭のアメリカの芸術界でいえば, ダダイズム, 表現主義, シュールレアリスム, またはラディカリズムなどに関心をもつ集団であった。それゆえ当時を振り返って, 多くのリトル・マガジンの編集者たちが, 「自分たちの雑誌には, 『リトル』という名前よりも『前衛』(advance guard)という名前のほうがふさわしい」と述べているのも肯けることである⁽⁵⁾。そこで厳密にいえば, 『シウオニー・レビュー』誌(*The Sewanee Review*, 1892-), 『イエール・リタラリー・マガジン』誌(*The Yale Literary Magazine*, 1910-), 『ケニオン・レビュー』誌(*The Kenyon*

Review, 1939-)などの雑誌は、リトル・マガジンの範疇には入らないことになる。これらの雑誌は、確かにリトル・マガジンと同様のインパクトを知的世界に与えてきたが、しかも利潤追求の営利主義的な雑誌ではないが、各大学により確実な資金援助を受けられる、いわば「正当な」学術誌ともいえるからである。

アンダソンとキンジーの研究書によれば、1912年から46年までに発行されたリトル・マガジンはおよそ600誌、70年代の半ばに発行されていたリトル・マガジンは、推測で1,500誌ほどである。創刊号、あるいは3号ほどでつぶれてしまう雑誌も多かったのも、実際の数字はこれらをはるかに超えていたようである。そして、ホフマンらの研究書に掲載されていたリトル・マガジンのうち、70年代の半ばまで命脈を保っていたのは、そのうちの僅か8誌だけであった⁽⁶⁾。いかにリトル・マガジンの盛衰が激しいかを、これらの数字は明瞭に物語っている。ちなみに、ホフマンらが指摘している雑誌廃刊の理由としては、次のような五つがある。単純な資金の枯渇、興味の喪失、編集方針の変更や後援者との不和による資金の引き上げ、何らかの事由で行われた政府による起訴・告発、そして内輪の喧嘩や誤解である⁽⁷⁾。このほかにも編集者の病気や死去、あるいは兵役による休刊・廃刊などもあったようだ。

こうした、いわば短命を宿命づけられたようなりトル・マガジンの中で、例外的に大きな成功をおさめ、いまではアメリカを代表する雑誌となっているリトル・マガジンも数誌ある。ハリエット・モンローがシカゴで始めた詩誌『ポエトリー』誌 (*Poetry: A Magazine of Verse*, 1912-)、ラディカルの陣営に属していた『パーティザン・レビュー』誌 (*Partisan Review*, 1934-2003) などである。『ポエトリー』はもともと上記のようなりトル・マガジンとして出発したが、まもなくアメリカにおける詩誌の代表格となり、以後エズラ・パウンド、T・S・エリオット、カール・サンドバーグらの詩を掲載して、今日まで継続している（現在は、アメリカ現代詩協会の機関誌でもある）。また『パーティザン・レビュー』誌は、1934年にニューヨークのジョン・リード・クラブ（共産党系の組織）により発行され、途中で他誌（『アンヴィル』誌 *The Anvil*, 1933-35）と合併したり、一時期休刊したりしながらも、長らくアメリカを代表する知識人の機関紙として機能していたが、2003年に廃刊となっている。2002年に雑誌創刊時からの編集者であり、もう一人の編集者フィリップ・ラーヴ（Philip Rahv, 1908-1973）とともに、ニューヨーク知識人の一人に数えられるウィリアム・フィリップス（William Phillips, 2002）が死去したためであろう⁽⁸⁾。

しかし、いまやアメリカの代表的な月間・季刊雑誌となったこれらのリトル・マガジンは、やはり例外的な存在で、大半は1年、長くても10年、20年とはもたなかったようである。もともと営利を目的とせず、1,000部を超えることは稀であったといわれるリトル・マガジンの存続は、そもそも編集者たちの主要な関心事ではなく、新しい才能を自由な表現形式で発表できる場所の提供こそ、彼らの第一のねらいであったからだ。

そして、その概して短い雑誌の発行期間のあいだに、たとえば『ミラー』誌 (*Mirror*, 1893-1920) は、E・L・マスターズ (Edgar Lee Masters, 1868-1950) の人物スケッチ詩集『スプーン・リヴァー・アンソロジー』 (Spoon River Anthology, 1915) を、『フィラスティン』誌 (*Philistine*, 1895-1915) はスティーヴン・クレイン (Stephen Crane, 1871-1900) の作品を、リトル・マガジンの代表格といわれる『リトル・レビュー』誌 (*The Little Review*, 1914-29) はカール・サンドバーグ (Carl Sandburg, 1878-1967) やヴェイチェル・リンゼイ (Vachel Lindsay, 1879-1931) の初期の詩作を、『ストーリー』誌 (*Story*, 1931-1999) はウィリアム・サローヤン (William Saroyan, 1908-1981) の初期の短編を、そして『ダブル・ディーラー』誌 (*The Double Dealer*, 1921-26) はヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の最初の作品などを掲載している。

ボーンが活躍した1910代に続々と刊行されたリトル・マガジン——『マッシズ』誌 (*The Masses*, 1911-1917), 『ポエトリー』誌 (1912-), 『リトル・レビュー』誌 (1914-1929), 『アザーズ』誌 (*Others*, 1915-1919), 『セヴン・アーツ』誌 (1916-1917), 『リベレーター』誌 (*The Liberator*, 1918-1924) ——では、よく知られているように、当時はまだ無名でありながら、やがて20世紀のアメリカ文学を支える綺羅星のような文筆家たち——シャーウッド・アンダソン (Sherwood Anderson, 1876-1941), ヴァン・ワイク・ブルックス, E・E・カミングズ (E.E. Cummings, 1894-1962), ジョン・ドス・パソス, セオドア・ドライサー (Theodore Dreiser, 1871-1945), T・S・エリオット (T.S. Eliot, 1888-1965), ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962), アーネスト・ヘミングウェイ, ユージン・オニール (Eugene O'Neill, 1888-1953), アレン・テイト (Allen Tate, 1899-1979), エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson, 1895-1972), トマス・ウルフ (Thomas Wolfe, 1900-1938) など——が相次いで登場していった。その意味で、1910年頃から始まるリトル・マガジンの隆盛は、エマソン以来の課題であった、ヨーロッパからの知的な独立・文学的な独立を目指していたアメリカ、そのアメリカの知的・文学的な土壌の「土おこし」の役割を見事に果たしていたのである。

ボーンが執筆の舞台とした雑誌のうち、『アトランティック・マンスリー』誌と『ニュー・リパブリック』誌は、上記のリトル・マガジンの範疇からは外れる商業雑誌といえるだろう。この両誌とボーンとの関係については後に触れるつもりだが、『アトランティック・マンスリー』誌はもともとハリエット・ビーチャー・ストー (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896), エマソンらが創刊に関わった、アメリカの代表的な文芸雑誌である。一方『ニュー・リパブリック』誌は、20世紀初頭のニューリベラリズムの指導者ハーバート・クローリー (Herbert Croly, 1869-1930) とウォルター・リップマンが始めた雑誌で、これまたアメリカを代表するオピニオン誌である。この両者とボーンは、ボーンの恩師ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) を間に挟んで、アメリ

カの第一次世界大戦への参戦をめぐって激しく対立し、やがてボーンのエッセイの発表の場は、あと二誌、リトル・マガジンへと移行していくことになる。ここからは、ボーン活躍の最高の舞台となった『セヴン・アーツ』誌について、少し詳しく見ていくこととする。

4. 『セヴン・アーツ』誌

1910年代にもっとも輝いていた代表的な知識人ラディカル——マックス・イーストマン (Max Eastman, 1883-1969) とフロイド・デル (Floyd Dell, 1887-1969)、この二人によって編集されていた『マッシズ』誌は、グレニッジ・ヴィレッジで支配的であった「ボヘミアニズムとラディカリズムの快適な結合」であり、「若き詩人、小説家、評判の高いジャーナリスト、そして才能ある画家や漫画家」を糾合して、金持ち階級の腐敗と貧者の欲求不満とを描き出していた⁽¹⁾。一方、ラディカリズムに共感を示しながらも、『マッシズ』誌の知識人ほどには政治的でなかったグループは、『セヴン・アーツ』誌の周辺に集うことになった。激動の10年代後半に産声をあげ、あえなく一年後には廃刊の憂き目をみたこの雑誌の短い歴史のなかに、この時代を駆けぬけていった知識人たち（ボーンはこの雑誌の廃刊一年後に亡くなっている）の姿が幾重にも重なって見えている。

『セヴン・アーツ』誌の編集長であり、おそらくは、もっともこの雑誌に愛着を覚えていたであろう詩人ジェームズ・オッペンハイム (James Oppenheim, 1882-1932) は、1882年、ミネソタ州セント・ポールで生まれた。子どもの頃、家族とともにニューヨーク市に引っ越してきて、そこで教育を受けている。コロンビア大学の公開講座に参加したのち、オッペンハイムは教師となり、この頃から幾つかの短編を書き始めている。詩人としては『国際社会主義評論』誌 (*The International Socialist Review*, 1900-1918) に発表した詩で注目を集め、時の社会党の幹部ジョン・スパーゴ (John Spargo, 1876-1966) が、「もっとも重要な新しい社会主義的詩人のひとり」であると、彼を高く評価したことがある⁽²⁾。すこし手前味噌的にはなるけれども、オッペンハイム自身は当時の自分の評判について、次のように記している。

当時のことについて話せば、私はもの書きとして、多少なりとも「人気」があった。実際その頃、ひとりの著作権業者は、もし私が自分の小説にこだわっていたならば、今ごろは「世界の頂点に座っていただろう」と話していた⁽³⁾。

これは『セヴン・アーツ』誌が廃刊となってから13年後、オッペンハイム自身が文学の世界からも、ヴィレッジからも、忘れ去られようとしていた頃の発言であるので、多

少割り引きをして考えなければならないが、ともかく彼が30歳代の半ば、文筆家としてももっとも充実していた時期に、『セヴン・アーツ』誌の編集の仕事にかかわることになったのである。

『セヴン・アーツ』誌を支えていた編集陣には、このオッペンハイムのほかに、副編集長としてウォルド・フランク、編集顧問としてヴァン・ワイク・ブルックス、詩人のルイス・アンターマイヤー (Louis Untermeyer, 1885-1977)、同じく詩人のロバート・フロスト (Robert Frost, 1874-1963)、そして編集顧問ではなかったが、音楽評論家として重要な役割を演じたポール・ローゼンフェルド (Paul Rosenfeld, 1890-1946) らがいた。オッペンハイムがこの編集陣のなかで最初に出会うことになったのは、ウォルド・フランクとポール・ローゼンフェルドであった。30年代に入って、『ニュー・マッシュズ』誌 (*New Masses*, 1926-48) などを舞台に大活躍をすることになるフランクは、イエール大学出のラディカルで、当時はまだ無名の文筆家であり、初めてオッペンハイムに出会ったときには、すでに名前の売れていた彼に、妬み半分の「不審げまなざし」を向けていたそうである⁽⁴⁾。もう一人のイエール大学出身者、熱心な音楽の愛好家ポール・ローゼンフェルドは、後にコロンビア大学でも学んでいたが、その頃すでに、ハーバート・クロリイの編集する『ニュー・リパブリック』誌で、音楽や文学について書き始めていた新進の批評家であった⁽⁵⁾。三人が出会った頃のヴィレッジの様子を、オッペンハイムは次のように記している

『マッシュズ』誌はグレニッチの大通りで異議申し立てをする口実として、カール・マルクスを利用し、プロヴィンスタウン・プレイヤーズ (リトル・シアターのグループ) はマックドゥガル通りに劇場を構え、フロイトはみんなの関心事であった。誰も彼もが、アート・ヤングでさえもが、何らかの変革を唱えていた。社会主義、セックス、詩、会話、夜明けの挨拶——中西部でタブーであるかぎりは、何でもかんでも。ほんの二、三年の間に、アメリカの芸術家が、とうとうチャンスを手にしたかのようであった⁽⁶⁾。

若いアメリカの知識人たちは、こうした高揚する雰囲気の中で、「芸術家や批評家がアメリカを支配できる」と本気になって信じ込んでいた⁽⁷⁾。そのために必要なものといえば、新しい雑誌、彼らが創造しようとする「新しいアメリカ文化」の伝達手段、彼ら自身のリトル・マガジンであった。オッペンハイムの提案で雑誌創刊が決まると、次に彼は、雑誌の資金提供者として、A・K・ランキン夫人 (Mrs. A. K. Rankine) という篤志家を探し出した。この夫人が「文学雑誌の後援をしたほうが気が紛れる」と勧める精神分析医の説得に応じて、ホイッスラー (画家・銅板画家)・コレクションを売り払い、オッペンハイムに資金の提供を申し出たのである⁽⁸⁾。

こうして雑誌発行の準備は順調に進んでいったが、もう一人どうしても欠かせない人物がいた。ヴァン・ワイク・ブルックスである。ブルックスはニュー・ジャージー州の裕福な家庭に生まれ、ハーヴァード大学を卒業すると、一時期ジャーナリストとして働いていた。そして1908年に、最初の著作『ピューリタンのワイン』（*The Wine of the Puritans*, New York, 1908）を発表し、そのなかでピューリタンの伝統がアメリカの文化を押しつぶし、物質的な価値を重んじるあまり、人生の美的な側面を無視していると警告した。このブルックスの主張は、彼の代表作『アメリカ成年に達す』（*America's Coming of Age*, New York, 1915）の中でも繰り返し表明され、そして人生と芸術とが分離しないアメリカ文学の規範として、ウォルト・ホイットマン（Walter Whitman, 1819-1892）評価につながっていった（しかしブルックスは、その後の著作のなかで、次第にこの説を撤回していくことになる）。オッペンハイムとフランクは、ブルックスのこの主張に大いに共鳴した。とくにウォルド・フランクは、ブルックスに宛てた手紙のなかで、『アメリカ成年に達す』は「われわれの未来の『セヴン・アーツ』誌の序章である」とまで呼んでいる⁽⁹⁾。こうして新雑誌の編集顧問として、二人はブルックスを迎えることになった。当時、翻訳の仕事などをしながら著述に専念しがっていたブルックスも、喜んでこの申し出を受け入れたのである。

「コミュニティに向けた芸術家の表現」という副題をつけて、『セヴン・アーツ』誌は1916年11月に創刊号を発刊した。この中で特筆すべきは、ヨーロッパから送られたロマン・ロラン（Roman Rolland, 1866-1944）のメッセージである。ロマン・ロランを創刊号に起用したのは、「芸術家は（アメリカを再生させる）仕事を担うパワーを持つジャン・クリストフである」という信念を抱いていた、編集長オッペンハイムの強い希望が反映されているようだ⁽¹⁰⁾。「アメリカと芸術」と題されたこの短い寄稿文のなかで、ロマン・ロランはまず、彼らの住む「旧世界が脅威を受けており」（具体的には1914年から始まっていた第一次世界大戦）、この困難な時代に、「揺らめく松明を掲げることこそアメリカの厳粛な義務」と述べている⁽¹¹⁾。これは旧世界の思想、感情、世俗的な観念に囚われていないアメリカに、混乱を極めるヨーロッパ社会から送られてきた救済のアピールであり、また新しい国アメリカへの期待感の表明でもあった。

次にロマン・ロランは文芸の世界にも触れ、そこでも事情は同様で、すでに確固とした伝統の規範があるヨーロッパとは異なり、アメリカはもっと自由に、誠実に自分自身を表現できるはずだと強調している。そして結びの言葉として、ロマン・ロランは、アメリカが果たすべき仕事の手本として、「あなたがたのホーマー、ウォルト・ホイットマン」がいるのではないかと述べている⁽¹²⁾。ロマン・ロランから送られた期待と激励とを込めたこのメッセージは、『セヴン・アーツ』誌の創刊号に書かれた編集陣のマニフェストに、そのままの形で反映している。

私たちがルネッサンス的な時代の最初の日々に暮らしていること、つまり、アメリカにとって偉大なことの始まりである国民的な自覚の高まりを意味する時期に暮らしている、というのが私たちの信念であり、多くの者の信念でもある。このような時代には、芸術は個人的な事柄であることを止め、国民的な生活の表現であるばかりでなく、その昂揚の手段ともなるのである⁽¹³⁾。

こうしてアメリカの文化的なルネッサンスの担い手として、意気軒昂として出発した『セヴン・アーツ』誌は、これ以降、編集陣の寄稿文のほかに、当時の指導的な文筆家、たとえばマックス・イーストマン、D・H・ローレンス (D.H. 1885-1930)、ジョン・デューイ、ジョン・リード、バートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872-1970) などの文章を掲載し、またすぐれた才能をもつ若者、たとえばシャーウッド・アンダーソン、セオドア・ドライサー、エイミー・ローウェル (Amy Lowell, 1874-1925)、ジョン・ドス・パソス、ユージン・オニールなどの作品を掲載して、次第に有力なリトル・マガジンとしての地位を確立していった。

雑誌がようやく軌道に乗り始めたこの時期に、もう一人の重要な人物が誌面に登場した。それがランドルフ・ボーンである。新しいアメリカ知識人の旗手として注目を集め始めていたボーンは、この時期にはすでに、デューイの影響を受けた実験学校（ゲリー・スクール, Gary Schools）での取材を通して、著作も発表していた⁽¹⁴⁾。しかしボーンがもっとも注目を集めたのは、「若きアメリカ」をけれんみなく賞賛し、その担い手として、若者の価値と矜持とを高らかに歌い上げたからである。

ボーンを『セヴン・アーツ』誌の知識人たちに紹介したのは、ヴァン・ワイク・ブルックスであった。すでに述べたように、第一次大戦への参戦気分が高まるなかで、それまでボーンの活躍の舞台であった『ニュー・リパブリック』誌が、ウィルソン大統領の参戦方針を支持するようになり、ハーバート・クローリィやウォルター・リップマンらの編集陣とボーンとの間で、次第に意見の対立が鮮明になっていた。そこで友人でもあったブルックスが、ボーンを『セヴン・アーツ』誌に紹介し、執筆の場を確保したのである。すでにボーンの著作を読み、彼を高く評価していた編集陣は、『セヴン・アーツ』誌へのデビュー作となる「ピューリタンの権力意思」(“The Puritan's Will to Power”, April 1917) を直ちに掲載することに決めた。ボーンとの出会いを回想したオープンハイムは、その頃のボーンの複雑な立場について概観し、それから次のように書いている。

ある日、おそらくわれわれが（第一次世界大戦に）参戦した直後に、彼（ボーン）が私のもとにやってきた。しばらく話をしてから、私は彼に雑誌に書いてくれるようにと頼んだ。すると彼は笑って、「私の言いたいことを書かせてはくれないでしょう

ね」と言った。そこ私は、「書いてみてくれ」と言った⁽¹⁵⁾。

こうしてボーンの代表的なエッセイ、「戦争と知識人」(“The War and the Intellectuals”, June 1917) は、『セヴン・アーツ』誌の六月号巻頭論文として掲載されることになった。このエッセイでのボーンの怒りは、それまで理性を用いれば、状況をコントロールできるという自己の能力を誇りとしていたプラグマティズムの知識人たちが、戦争を打算的に考えて、自分たちの原則を無方針に放棄した点に向けられていた。つまり、知識人たちは「原則を(戦争という)技術のいけにえ」にしたのであった⁽¹⁶⁾。具体的にはボーンの批判は、恩師であるジョン・デューイや気鋭の学者として名声を確立し始めていたウォルター・リップマンらに向けられていたが、それは同時に、当時、アメリカの参戦支持に傾いていた知識人全体の無責任さにも向けられていた。

ボーンの平和主義の根底には、アメリカの中立こそが「この国に世界の平和的な指導者となる機会を与えるのだ」という強い信念があったからだが、しかしその一方で、ボーンは文筆家として最初から、絶えず「若さ」に対する揺るぎない確信を持ち続けていた⁽¹⁷⁾。彼はヨーロッパでの戦争にアメリカが捲き込まれることで、アメリカの若々しい活力が歪められてしまうことを何よりも恐れていた。『セヴン・アーツ』誌に発表したもう一つのエッセイ、「戦争日誌」(“A War Diary”, September 1917) のなかで、ボーンは「戦争か——あるいはアメリカの未来か、どちらかを選択せねばならない」と語りかけ、「双方に関わることはできない。戦争の影響で、アメリカの未来が貧弱になるからである」と述べている⁽¹⁸⁾。エリック・J・サンディーン(Eric J. Sandeen)が指摘しているように、確かにボーンは、この『セヴン・アーツ』誌を舞台にして、自分の平和主義と若さに対する理想主義とを結び付け、アメリカの若い世代に対して、熱い思いを繰り返して述べていたのである⁽¹⁹⁾。

オッペンハイムがボーンの出現を「『セヴン・アーツ』誌に起った、もっとも偉大な出来事」と呼び、フランクがボーンこそ「政治的、文化的な進歩の潮流を、その作品のなかで合体」させ、もし生き長らえておれば、ヴァン・ワイク・ブルックスに匹敵する仕事をなし終えただろうと書いているのも、頷けることである⁽²⁰⁾。

しかしボーンの登場は、『セヴン・アーツ』誌にとっては、両刃の剣であった。つまり、オッペンハイムの認めるとおり、ボーンの参加で『セヴン・アーツ』誌は彼らを導く「真のリーダー」を迎え、雑誌創刊時のマニフェストを具体的に実現する態勢を整え、そして現実的にも、雑誌の発行部数が次第に上昇の兆しを見せ始めていた。だがボーンの雑誌への参加、その過激な反戦論、妥協を許さぬ厳しい筆致は、ある意味で予想通りのところからの反撃を受けることになった。

1917年4月、アメリカが参戦を決定して以来、世論は圧倒的にウィルソン支持で固

まっていた。『セヴン・アーツ』誌に対する風当たりはますます強くなっていた。そしてその年の秋に、雑誌の後援者が世論に恐れをなして、つまりボーンの平和主義は受け入れられないと言って、とうとう『セヴン・アーツ』誌から手を引いてしまったのである。雑誌の創刊から数えて、わずか一年後のことであった。編集陣では、雑誌継続の意気込みが高かったが、結局、編集内部での意見の対立（具体的にはオッペンハイムとブルックスとの対立など）もあり、再び『セヴン・アーツ』誌が発行されることは二度となかった。当時、まだ雑誌の編集陣の一員であったロバート・フロストは、「『セヴン・アーツ』は、ボーン焼け（a-Bourning）で死亡した」と述べている⁽²¹⁾。言い得て妙と言うべきか。また『セブン・アーツ』誌が廃刊の危機を迎えたこの時期に、その存続のために奮闘する副編集長ウォルド・フランクに対して、ヴァン・ワイク・ブルックスは、私たちが「本を書く時期がやってきたんだ」と話している。確かにブルックスの指摘したとおり、単に『セヴン・アーツ』誌の知識人だけでなく、すべての若き文筆家たちが、そろそろ自分の主張を一冊の本にまとめて出版する時期にさしかかっていた。それは彼らの年来の希望でも、また野心でもあった。

（続く）

註

（註：1. はじめに）

- （1）Van Wyck Brooks, *History of a Literary Radical* (New York, 1920), xii; Waldo Frank, *Our America* (New York, 1919), 198. ボーンは当時、第一次世界大戦へのアメリカの参戦に反対し、プラグマティストで自分の恩師でもあったジョン・デューイやウォルター・リップマンを相手に、激しい論戦を挑んでいた。全体が参戦論に傾いていく中で、ボーンのエッセイを読み、その趣旨に感動した人物には、若い文筆家のほかに、アメリカ最初のセツルメント・ハウスである「ハル・ハウス」(Hull House) を設立したジェーン・アダムズがいた。
- （2）これより少し前（1954年）にアメリカに留学し、ボーンを修士論文のテーマに選んだ日本の研究者がいた。ボーンの簡潔な解説として参照されたい。本間長世『思想としてのアメリカ』（中央公論社、1996年）pp.27-39を参照。
- （3）Randolph Bourne, “Trans-National America,” *The Radical Will* (New York, 1977), 258. ボーンのコスモポリタニズムは、やがて30年代のリトル・マガジン『パーティザン・レビュー』誌 (*Partisan Review*) に、その精神が受け継がれていくことになる。
- （4）Randolph Bourne, “Trans-National America,” *War and the Intellectuals* (New York, 1964), pp.117-118
- （5）Terry A. Cooney, *the Rise of the New York Intellectuals: Partisan Review and Its Circle* (Madison, 1986), 22-25. を参照。
- （6）John Dos Passos, *1919* (New York, 1932), 105-106.

（註：2. 幼少年時代—障害について）

- （1）ボーンの家系については、Louis Filler, *randolph bourne* (New York, 1943); John Adam

Moreau, *Randolph Bourne: Legend and Reality* (Washington, D.C., 1966); Bruce Clayton, *Forgotten Prophet: The Life of Randolph Bourne* (Baton Rouge, 1984)などを参照。

- (2) Louis Filler, *randolph bourne* (New York, 1943), 8.から引用。
- (3) John Adam Moreau, 3.から引用。
- (4) ボーン自身は、出産時の出来事を「恐ろしく面倒な出産」(terribly messy birth), 結核による発育不全を「第二の衝撃」(second blast)と呼んでいる。
- (5) John Adam Moreau, 5.から引用。
- (6) Louis Untermeyer, *Bygones: The Recollection of Louis Untermeyer* (New York, 1965), 39; Waldo Frank, *In the American Jungle* (New York, 1937), 59.
- (7) Louis Filler, *randolph bourne*, 9.
- (8) Randolph Bourne, "The Handicapped," *The Radical Will* (New York, 1977), 75.
- (9) *Ibid.*

(註：3. 1910年代のアメリカとリトル・マガジン)

- (1) これらの雑誌というのは、具体的には、保守的な『ネイション』誌、ラディカルな『マッシュズ』誌と『セヴン・アーツ』誌、ずっと一般的な『マックレイカー』誌であった。Henry F. May, *The End of American Innocence: A Study of the First Years of Our Time, 1912-1917* (New York, 1992), p.404.
- (2) James B. Gilbert, *Writers and Partisans: A History of Literary Radicalism in America* (New York, 1968), p.16.
- (3) Alfred Kazin, *On Native Grounds: An Interpretation of Modern American Prose Literature* (New York, 1942), 166. からの引用。なお実験学校については、ボーン自身もインディアナ州の実験学校について、著作を発表している。Randolph Bourne, *The Gary Schools* (Boston, 1916.)
- (4) John P. Diggins, *The American Left in the Twentieth Century* (New York, 1973), p.73.
- (5) *The Little Magazine*, p.3.
- (6) *The Little Magazine in America*, p.10.
- (7) *The Little Magazine*, p.6.
- (8) 『パーティザン・レビュー』誌創刊の際に、アメリカ共産党がどの程度関与していたのかについては、いまだに論議の対象となっている。ドワイト・マクドナルドの浩瀚な研究書 (*A Rebel in Defense of Tradition: The Life & Politics of Dwight Macdonald*, New York, 1994) を著わしたMichael Wreszinは、*Partisan Review* 3 (Summer 1995, Boston University) の読者欄で、創刊時の共産党による資金提供を指摘した。これに対して次号の*Partisan Review* 4 (Fall 1995, Boston University) の読者欄で、創刊時からの編集委員であるWilliam Phillipsは、この事実を全面的に否定している。

(註：4. 『セヴン・アーツ』誌)

- (1) John P. Diggins, p.80.
- (2) James B. Gilbert, pp.12-13. この雑誌は1918年、第一次大戦時の検閲により廃刊に追い込まれたが、それから二度にわたり復刊されて現在に至っている。
- (3) James Oppenheim, "The Story of the Seven Arts," *American Mercury*, XX (1930) p.156.
- (4) James Oppenheim, *ibid.*

- (5) Paul Rosenfeld, *Port of New York* (Urbana, 1961), p.xv.
- (6) James Oppenheim, p.157.
- (7) James Oppenheim, *ibid.*
- (8) Henry F. May, p.325.
- (9) James Hoopes, *Van Wyck Brooks: In Search of American Culture* (Amherst, 1977), p.110.
- (10) James Oppenheim, p. 156.
- (11) Romain Rolland, "America and the Arts," *The Seven Arts* (November, 1916), p.47.
- (12) Romain Rolland, p.51.
- (13) Editorials, *The Seven Arts* (November, 1916), p.52.
- (14) Randolph Bourne, *The Gary Schools* (New York, 1916).
- (15) James Oppenheim, p.163.
- (16) *The Letters of Randolph Bourne: A Comprehensive Edition*, edited by Eric J. Sandeen (New York, 1981), p.356.
- (17) *The Letters of Randolph Bourne*, *ibid.*
- (18) Randolph Bourne, "A War Diary," *The Seven Arts* (September, 1917), p.46.
- (19) *The Letters of Randolph Bourne*, pp.356-357.
- (20) James Oppenheim, p.163. Waldo Frank, *Our America* (New York, 1919), p.199.
- (21) *The Letters of Randolph Bourne*, p.355. から引用。